

—創世記 18章・1-10a、コロサイ 1章 24-28、ルカ 10章・38-42—

(そのとき、)イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」—ルカ 10章—

## 神様のお気に入り

イエスさまは、町や村を巡っておられた時、いろいろな人から招かれたようです。「福音書」では、マルタがイエスさまを家に迎えました。

マルタは、客人の会話に加わるよりも今、客人をいかにもてなすか、頭がいつぱいなようです。イエスにどのよう喜んでもらうかと、あれもこれも、胸おどらせて甲斐甲斐しく働いているさまが、第一朗読の「創世記」に見る、通りがかりの見知らぬ旅人をもてなそうと、準備に走り回るアブラハムとダブリます。

日本にも、東北地方には、「おご食さん」を、神の使いとしてねんごろにもてなす習慣があるようですが、食事の間、傍に立って給仕したアブラハムは、神とは知らずにもてなした旅人から「神の約束」の実現を告げられます。

一方、一人、忙しさに追われる姉に無関心でいる妹マリアを訴えた姉マルタに、イエスが告げたのは、「必要なことはただ一つだけ」、生活の思い煩いに気を取られて心を見失わないようにという一点でした。

信仰者にとって大切なこと、すなわち、「救い」に必要なことはただ一つだけです。それは「神に心を向け、神に好まれる人になる」ことです。

以前、無二の親友から、要介護の彼の母親のことで相談を受けました。

「穏やかだった母親が、近頃まるで狐つきになっただかのように、周りにむすかりだした」というのです。彼の家族は親孝行で有名な家族です。どうしたものかと、私は推測で、「ひょっとしたら、あなたのお母さん、そつなく何でも世話してくれる

人よりも、お母さんの気に入った人が傍にいてくれる方が嬉しいんじゃないかしら？」と言いましたら、「あっ、分かった。ありがとう！」と、彼はすぐ電話を切りました。その後、彼からこのような相談を聞くこともなく、お母さんはまもなく天に召されて逝きました。

2022年 7月17日  
主任司祭 昌川信雄

